

## 別離と再会 ― 日本の古典文学に見る愛の悲劇 ―

愛知淑徳大学文学部教授 久保朝孝

### ◎伊勢物語

平安時代の歌物語。作者未詳。在原業平らしき男性の一代記風のかたちで、色好みすなわち男女の情事を中心に風流な生活を叙した約一二五の説話から成る。業平の歌集を原形として生長したかという。現在の形になったのは平安中期か。在五が物語。在五中将の日記。勢語。『広辞苑』第六版）

### ◎第六十段の要旨

仕事に追われて家庭を顧みなかった男の妻が、他の男と他国へ逃げる。その後出世した男が勅使として宇佐八幡へ向かうおり、今は地方官の妻となった女と再会し、変わらぬ愛情を和歌に託して伝えるが……。

### ◎第六十二段の要旨

夫から顧みられなかった妻が、他の男と逃げて他国で召使いとして暮らしていたところ、かつての夫がその家の客として来訪する。再会した男は、女にその容貌と境遇の衰えを責める和歌を二首詠み掛けるが……。

### ◎両章段の共通点は何か。

### ◎両章段の相違点は何か。

### ◎和歌の機能

### ◎章段の構造

←  
→

### ◎素材としての〈桜〉と〈橘〉

〈桜〉・世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし（『伊勢物語』第八十二段）  
・散ればこそいとど桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき（同）

〈橘〉・橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜置けどいや常葉の木（『万葉集』巻第六・1009）

・田道間守（たじまもり）：記紀伝説上の人物。垂仁天皇の勅で常世の国に至り。非時香菓（ときじくのかくのこのみ）（橘）を得て十年後に帰ったが、天皇の崩後であったので、香菓を山稜に献じ、嘆き悲しんで陵前に死んだと伝える。（『広辞苑』第六版）